

令和7年度（2025年度）熊本県環境審議会水保全部会議事録

日時：令和8年（2026年）1月28日（水）10時～12時まで  
場所：熊本県庁防災センター地下1階 B01会議室  
出席委員：嶋田部会長、坂上委員、皆川委員、三栗野委員、山田委員、太田委員、  
田中委員、中田委員  
※うち中田委員はリモートによる出席

1 挨拶

熊本県環境生活部環境局環境保全課 廣畑 課長

2 審議事項

- ・令和8年度（2026年度）公共用水域及び地下水の水質測定計画（案）

(1) 令和8年度（2026年度）公共用水域の水質測定計画（案）

- ① 別添資料2-1「令和8年度（2026年度）公共用水域の水質測定計(案)に基づき事務局から説明。
- ② 参考資料「熊本市の有機フッ素化合物対策について」に基づき関係機関（熊本市）から説明
- ③ 質疑

★ 坂上委員

○坂上委員

資料2-1 スライド22 ページ、河川におけるBODの経年変化について、全体的には改善傾向とあるが、令和6年度の結果が、最近10年で見ても高い状況となっている。この理由は降雨のみなのか、それとも他にも何か理由があるのか。

○事務局

BODの平均値については、環境基準点以外の補助点も含めて、全ての地点の値を平均して出したもの。河川のBODの上昇要因としては、降雨で河川の流量が増えたことによる底泥の巻き上げが1つの要因であると考えているが、これが令和6年度の値の上昇原因の全てといえるかは不明。

★ 皆川委員

○皆川委員

スライド24 ページ海域のCODについて、有明海（7）、八代海（7）等が上昇傾向に見える原因は。また、熊本市のPFASの取組みで廃棄物処分場からの流出の可能性について説明があったが、廃棄物処理施設の許可申請時に施設をどのように作ったのかが重要と思われる。例えばこういった構造が良くなかった等の情報があれば教えていただきたい。

### ○事務局

海域の COD について、御指摘のとおり過去 10 年のグラフは値が上昇傾向に見える。COD の上昇要因は陸域からの汚濁負荷の流入が大きな原因と思われるが、その点に関しては汚濁負荷の削減など取り組みを行っているものの、明確な原因は把握をしていない。ただし、より過去からの推移を見ると減少傾向と思われるため、短期的な微増減の傾向も注視し、原因を考察しながら調査を進めて参りたい。

### ○皆川委員

海水温の影響等も考えられるが、環境省が有明海八代海の特措法関係で、他県も含めた長期的なトレンド要因の解析等をしていたと思うので、そちらの資料も確認しておいた方がよい。

### ○事務局及び関係機関（熊本市）

参考にさせていただく。2 つ目の廃棄物最終処分場の件について、熊本市の廃棄物規制部門が所管しており、この場で詳細な説明は難しいが、有機フッ素化合物は過去に様々な用途に使われてきた物質であるため、受入対策というのは難しいと思われる。処分場の浸透水から PFOS、PFOA が検出されているため、敷地外からの雨水流入対策などを進めているところ。

## ★ 田中委員

### ○田中委員

皆川委員から海水温の指摘があったが、1985 年くらいから全国的に海面が上昇傾向にある。熊本の三角では平均して年間 0.57cm ほど上昇している。調査対象が海なので広域的な話として、海面の状況などにも関心を持って検討すると何かわかるかもしれない。

### ○事務局

参考にさせていただく。

### ○田中委員

来年度、熊本県は海域の PFOS、PFOA 調査を開始する予定だが、他県で過去に同様の調査事例があるか、または今後予定があるか。併せて、調査の根拠として国の通知等があるのか、それとも県独自で始めるのかについてもお聞きしたい。

### ○事務局

PFOS、PFOA 海域調査の県外の状況について、熊本県が初ではなく、九州では福岡県も令和 4、5 年に調査を実施。全国の状況として、実施している都道府県は多くないと思われる。調査実施の根拠について、特に国から海域調査の通知等は発出されていないが、常時監視として県内の状況を一度把握するという目的に加えて、その結果を県民に発信し、安心いただくということも目的としているため、PFOS、PFOA の海域調査を来年度追加しているところ。

## ★ 中田委員

### ○中田委員

熊本市の有機フッ素化合物対策で、植木地域の地下水の濃度を調査しているが、PFOS、PFOA、PFHxS の3種以外に、テロマーアルコールや前駆体等も含め、何種類ぐらい他に測定しているのか。

### ○関係機関（熊本市）

現在 PFOS、PFOA、PFHxS、イオン成分等を測定しており、来年度以降は短鎖 PFAS 等を測定する予定である。

### ○中田委員

全部で 10～20 種類ぐらいか。

### ○関係機関（熊本市）

要調査項目 7 項目を追加する予定なので、現在の 3 項目とあわせて計 10 項目を予定している。

### ○中田委員

PFAS 類は同時分析が可能なため、発生原因の特定には、可能な限り多くの PFAS 関連物質を測るとよい。また、ヘキサダイアグラムによる解析以外に、統計手法なども使えるため、統計手法の専門家に相談することも効果的と思われる。

### ○関係機関（熊本市）

参考にさせていただく。

## ★ 嶋田部会長

### ○嶋田部会長

資料 2-1 の 35 ページの、PFOS、PFOA を河川 26 地点で実施し、全ての地点で指針値を下回ったと記述があるが、これと熊本市の井芹川の関係は。

### ○事務局

26 地点というのは、公共用水域常時監視の測定計画に基づいて実施した項目及び計画外であっても常時監視の一環として測定し県に報告のあったものを計上しているのので、熊本市の井芹川等の調査が常時監視の一環であれば含まれるが、常時監視とは別の取組みとして行われれば含まれない。

### ○嶋田部会長

県の 26 地点は 9 ページの公共用水域の調査地点の全てではなく、この中からセレクトして 26 点選ばれてるのか。関係が見えない。

### ○事務局

26 ページの環境基準点すべてで要監視項目を実施しているわけではない。県であれば、主要河川の最下流地点を対象に 3 年でローリングをし、その他の各測定機関にお

いても要監視項目の調査が必要な地点を選定し実施しているので、すべての基準点で、要監視項目を実施しているわけではない。

○嶋田部会長

3年ローリング調査をすれば、全ての環境基準点でやったことになるのか。

○事務局

3年経つと全ての環境基準点で要監視項目を測定したことにはならない。資料2-3に公共用水域の水質測定計画（要監視項目）のページがあり、そこに県で対象としている要監視項目の地点並びに各測定機関が一覧になっている。

PFOS、PFOAは全ての環境基準点で網羅的に調査している。要監視項目は、これまでもローリングで実施してきており、県内の主要河川の最下流を調査地点としている。その理由は、最下流で何か判明した場合に上流側に遡っていくため。

○嶋田部会長

井芹川下流は、熊本市の常時監視地点だが超過無しのため計画上では超過無し。ただし、他河川と比べ高かったので、上流側の調査も市が独自で実施したということ、常時監視を契機とし、上流まで遡っての調査に至ったということか。

○事務局

その通り。

○嶋田部会長

理解した。その点では網羅的な監視に意味があったということで問題ないか。

○事務局

その通り。下流側でのモニターが重要な根拠の一つになると考えられる。同様の考え方で、要監視項目も主要河川の最下流地点で実施している。

○嶋田部会長

承知した。

(2) 令和8年度（20256度）地下水の水質測定計画（案）

- ① 別添資料2-2「令和8年度（2026年度）地下水の水質測定計画(案)」に基づき事務局から説明。
- ② 質疑

★皆川委員

○皆川委員

令和6年度の結果が示されているが、地下水の経年的な変化状況が資料から読み取れなかったため、値と超過地点のトレンドについて教えていただきたい。また、先ほど熊本市の説明で、市が別途委員会を立ち上げていたが、この水保全部会に関して、本日は計画の審議だが、基準超過時の議論はどこで行うのか。

○事務局

まず、トレンドについて、地下水は河川と違い、所有者の方の事情等で井戸の継続的な調査が難しい点がある。今後は全体のトレンドが分かる資料を作っていきたい。

なお、基本的に汚染地点を継続調査するので、値は下がっていくことが多い。特にクリーニング（VOC）などは現在使用されておらず、継続的な負荷が無いため低下傾向となる。PFOS、PFOA も現在使用されておらず、値は下がっていくと考えられる。一方、地質由来の基準超過の場合は変動が少ない。

基準超過時の議論について、超過地点に対し原因を究明する場合、背景を踏まえて、行政で行うか有識者を交えるかはケースによる。熊本市の場合は、有識者会議を立ち上げた。熊本県は、現時点において県独自で実施しており、これまで飲用井戸や処分場を契機として周辺調査を実施した例があるが、広域での超過は見られていない。

#### ○皆川先生

測定計画に錦町が入っている理由は。

#### ○事務局

市町村の調査も、県内で計画的に測定するものは測定計画に盛り込んでいる。錦町は、過去の VOC 汚染に起因して、町が継続して調査していたものと記憶している。

### ★山田委員

#### ○山田委員

熊本市の井戸のイについて、PFOS、PFOA が増加傾向に見える。中田委員の意見にもあったが今は様々な解析ができるので、空間的な因果関係等を検討したほうが良いと思う。超過地点以外の調査についても、計算式で測定が必要な箇所が推定できるのではないかと思う。増加の原因は判明しているか。

#### ○関係機関（熊本市）

原因は不明である。今回は令和 7 年 4 月までのデータを示したが、それ以降も 3 ヶ月に 1 回継続調査して推移は確認している。今回示したデータ以降では濃度の減少も見られている。原因究明について別途調査を進めている状況である。

### ★嶋田部会長

#### ○嶋田部会長

地下水の計画の T 点や G 点について、PFOS、PFOA が計画外の地点で指針値超過した場合は継続調査しているのか。

#### ○事務局

宇土市と宇城市での超過を県で把握、そちらは測定計画外として継続予定。

### ★田中委員

#### ○田中委員

11 ページでふっ素の基準超過の原因として、阿蘇火山の影響の説明があったが、県北の鹿本、菊池地域は花崗岩からの溶出が原因と思われる。山鹿や菊池の温泉成分を

調べると明確にふっ素が高いので分かりやすい。よってこの地域は火山ではなく花崗岩の影響でふっ素が高いと考えて良い。

○事務局

参考にさせていただく。

(3) 令和8年度(2026年度)公共用水域及び地下水の水質測定計画(案)

①審議まとめ

★鳴田部会長

○鳴田部会長

公共用水域及び地下水の令和8年度計画の事務局案について、異議はないか

○鳴田部会長

異議はないとのことで、原案を部会の決議とし、本日の審議内容は環境審議会へ報告する。